

角点を探し出すことは出来なかった。

(記・)

〔タイム〕 赤倉ノ沢出合(七:三〇)

↓ 遡行終了(九:三〇) ↓ 九一〇

八三三角点峰(九:四五)

浮小屋沢

昭和長 巧・カトイキ
一九八六年六月二八日

山の神沢左俣の遡行終了後、稜線

より浮小屋沢に下降する。一五分程のヤブこぎで沢に出る。すぐ水の流れが現れる。

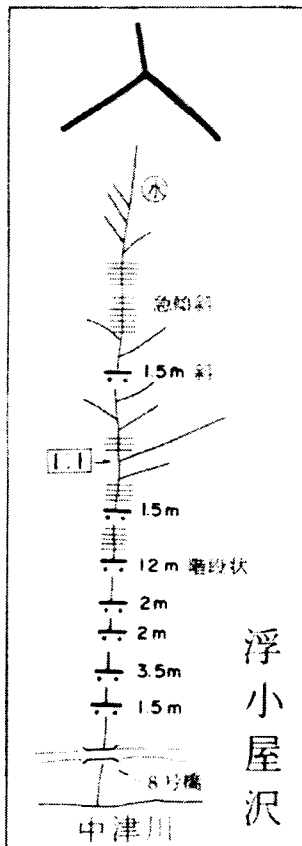
所々三層程のナメ状滝がまざる急坂を過ぎると、急傾斜のナメとなる。しばらくナメを下

ってゆくと、一・五層の斜瀑が現れる。このあたりまでくると、沢の傾斜もゆるくなり、

やがて二俣となる。

平凡な河原をしばらく歩いたあと、再びナメ床が現れる。そして一二層階段状の滝。右岸をなんなく下降。

その後は、何本かの小滝を越える。二本続く四層滝を越えると、中津川



林道にかかる八号橋であった。

(記・)

〔タイム〕 下降開始(一一:〇五) ↓
二俣(一二:〇五) ↓ 下降終了(一三:五〇)

冬の沢登り

冬の沢は、雪に覆われて私達を拒んでいる。そんな中、最近冬の遡行を行うものが出てきた。遡行する地域は限られているし、沢登りの本流とは成りえないと思うが、その魅力は格別なものがある。▼沢を氷が覆って絵にも言われぬ景色を形作っている。側壁からは氷柱が下がり滝は凍って行く手を阻む。そんな中を遡行する時、遡行への情熱は高まり周りの寒気さえ苦にならなくなる。